

2022. 1

事務局（地独）京都市産業技術研究所 デザインチーム（担当:比嘉, 竹浪）  
kyotonokogei@tc-kyoto.or.jp  
〒600-8815 京都市下京区中堂寺粟田町91  
TEL：075-326-6100（代表） FAX：075-326-6200（事務局）

26

NO. / 27  
(合併号)

# 京都工芸研究会便り

## 委員長御挨拶



新しい年を迎え、会員の皆様におかれてはご清祥のこととお慶び申し上げます。

昨年は新型コロナ禍で世界が激変しました。そこから人類が学んだことも多々ありました。また、地球温暖化はじめ環境問題もクローズアップされ、伝統工芸界におきましても変革が必要な時と捉えています。

身近には、サーキュラー・エコノミー（循環経済）の実践が、委員会といたしましても取り組まねばならない優先課題と捉えています。

工芸の土台となります森林・竹林・鉱物・植物などの資源の破壊や枯渇を食い止め、環境との整合性を図ることこそが、工芸の継承の源と考えています。

資源を製品化し壊れば捨てるという従来の経済システムのなかで、捨てられた製品を新たな資源とし廃棄物を出さない循環経済への変革は、幅広い業種の連携が必要となります。また消費者のエンカル志向への注目や協力も不可欠です。これらの推進を通して異業種・異分野連携が生まれ、さらに地域のつながりを再生させることがオープンイノベーション構築になると期待しています。

原材料や商品デザインの段階から再利用や修理を前提として取り組み、良いものを入手し、愛着を持って未長く使う、「サーキュラー・デザイン」は伝統工芸の得意とする分野です。

仕事の上ではオンラインが定着し、逆にリアルでの会話にホッとする昨今ですが、会員の皆様からのご意見もいただきつつ、世界の流れを視野に入れた着実な事業活動になりますよう、取り組んで参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

令和四年 一月吉日

京都工芸研究会 委員長 大塚正洋

サーキュラー・エコノミー：既存の資産を循環的に利用し続ける経済モデル。循環経済。  
サーキュラー・デザイン：資源が循環するための仕掛けをあらかじめ製品に組み込んだデザイン。

## 1. 事業企画チーム 製品開発事業「こうげい組体操」始動します！

事業企画チームでは、新たに製品開発事業を企画しました。

その名も「こうげい組体操」！

組体操といっても、運動会や体育祭ではありませんのでご安心ください。異業種分野と2人組・3人組を作って、組体操のように協力し合って新商品を生み出す「異業種コラボ企画」です。

2022年、年明けには募集要項を取りまとめ、ご案内いたします。どうぞお楽しみに！



## 2. シリーズ 会員に訊く (第1回) 竿頭齋 小川進さん

京都工芸研究会では、ベテランの会員さんに工芸の仕事や今までのあゆみについてじっくりとお話を伺う「ロング・インタビュー」を企画しました。その第一弾として、竹工芸の小川進(竿頭齋)さんをお招きして、竹工芸を志すきっかけや修業時代のエピソード、作り手に求められる資質について伺いました。小川さんは高校卒業後に石田正一氏(竹美齋 特別会員)に師事し、竹工芸歴55年の大ベテラン。月に1回の「竹編組勉強会(現在は休会中)」では若い作り手と交流して丁寧な手仕事の楽しさを伝えておられます。

(6月24日に実施したインタビュー内容をもとに、その後お手紙でいただいた補足部分をピックアップし「後日談」として追加して構成しています。)



一 さっそくですが、研究会の中でも小川さんはお仕事の丁寧さで評判ですが、竹工芸のお仕事をされるうえで、心がけていることを教えてください。

小川：まずは道具ですね。道具にこだわらない作り手もありますが、やはり良い仕事をするには良い道具が必要だと思います。

よく「工芸は技術だけで元手がかからないもの」と思われがちですが、目の肥えたお客さんほど「道具」を見ます。道具を使いこなしているか、手入れや整理整頓が行き届いているか、良い仕事にはそれが大切なことだと思います。

一 小川さんは竹編組勉強会(※1)でも、作業だけでなく材料の下ごしらえや設計図に至るまでとても精密なのでいつも驚きます。元々手先が器用だったのでしょうか？

小川：飛びぬけて器用というわけではありませんでしたが、子供の頃から工作は好きでした。道具を買うお金が無かったので、鉛筆削り用の小刀を使って、よく紙工作をしていました。紙ヒコーキは山ほど作りましたね。ボール紙で四角い箱をたくさんこしらえて、西洋のお城のような建物も作りました。

一 好きなことをお仕事にされたのですね。工芸には様々な分野がありますが、竹工芸の道を志そうと思ったのはなぜですか？

小川：高校の修学旅行で九州に行った時、鹿児島や別府で竹細工の籠などを見たのがきっかけです。籠やザルなど、ひとつの材料で作れる商品が多いことに魅力を感じました。受験勉強が嫌いだったというのもありますね(笑)。

一 てっきり京都の竹工芸がきっかけなのかと思っていました。京都に来る修学旅行生にも、小川さんが体験されたような出会いがあるといいですね。どのように弟子入りされたのでしょうか？

小川：昔の時代でしたので、電話帳から調べて、学校を通じて京都の工房5件ほどに直接問い合わせしました。

一 石田竹美齋さんに弟子入りした決め手は何だったのでしょうか？

小川：お手紙の字がとても綺麗だったので、魅力的に思ったんです。弟子入りした後に、その手紙は奥様が書いたとわかったのですが(笑)。

一 お弟子さんだった頃のお話を聞かせてください。

小川：住み込みで、1日13時間ほど働いて、休みは月に3日でしたが、とても大事にさせていただきました。

一 高校を卒業したばかりですと、遊びたい盛りの年頃だったと思いますが、もっと休みがほしいとか、遊びに行きたいとは思いませんでしたか？



竿頭齋作 黒竹網代編口丸(小物入れ)

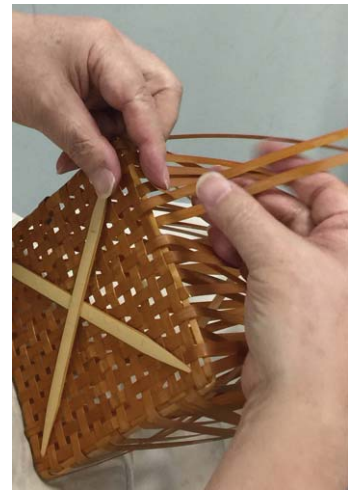


小川さん所有の道具類。編組用の型や見本など資料としても貴重なもの。竹編組勉強会展示会「見てくだ祭」(2016年 京都伝統産業ふれあい館 イベントルーム)に出展された。

※1 京都工芸研究会竹工芸会員を中心に月1回実施している勉強会。



体験教室で指導する小川さん。  
竹編組勉強会展示会「見てくださ祭」（2016年）にて。



籠の底を編む小川さんの  
手さばきはとても繊細だ。

小川：手仕事の修業は、出来ない事を繰り返しの積み重ねで少しずつ出来るようになっていくのが普通の事なので、仕事時間が短い所では、自分の意思で休み時間に練習するようでない一人前にはなりません。ですから仕事時間が長いのは気になりませんでした。

修業中はお金もないし、時間があれば仕事をしていました。まず技術を身につけることが第一です。師匠からは褒められることはあまりなかったのですが、元来器用だったせいか、仕事はいろいろ任せていただきました。でも、勘に頼った仕事だと「なぜできたのか」がわからないので、次にやっても同じものができないこともありました。勘が良いのも考えものですね。失敗を繰り返した方が、良い物ができるのです。

私が修業していた頃は竹工芸の仕事がたくさんあって忙しかったです。与えられた仕事とか、先輩の仕事の手伝いとか、次々に言われる仕事をしていました。自分で「不出来だな」と思う仕事が納品されていくのは、ちょっと心苦しかったです。

親方から「次はこれをやってみ」と言われた仕事を必死になってやって、なんとか格好がついてホッとして。しばらく間を置いて、同じ仕事をまた「やれ」と言われて、やったら今度はうまく出来なかった時、親方から「この前はできてたやないか」と叱られたりすると「なんとなく出来たりするのは良くない」と思うのです。小器用に出来ない方が大事なのではないかと思えます。

— 「センスだけだと身につかない、愚直な繰り返しが大切」というのは工芸全般に通じるかもしれないね。

— 小川さんがお仕事をするにあたって、他にも心がけていることがありましたら、お聞かせください。

小川：気合を入れ過ぎない、ということですね。以前、息抜きに川島織物で手織り体験に参加したことがあるんです。他にも参加者がいたのですが、みなさん気合を入れて糸を張りすぎたり、箆（おさ）を強く叩き過ぎたりして、出来た織物が縮んでしまったのです。私は教わったことを守ってマイペースでやったので上手くできました。気合を入れ過ぎないほうが身につくこともあるのです。

— うまく作ろう、という気持ちが空回りしてしまうことはよく分かります！気合を入れ過ぎない、というのは簡単なようで難しいですね。それもひとつのセンスかもしれないね。

小川：でも一方で、熱くなりやすい性格なんですよ。「箱入り娘（※2）」という有名なパズルがありまして、本をちらっと見て、自分でこしらえて自分で解こうとしたのですが、なかなか解けない。躍起になって解いた後に答えを見たら、パズルの問題自体を間違えて作っていて、普通より難しいものになっていたんです（笑）。

#### 【後日談】仕事について

仕事の要領とかを文章にして書き残したりするのですが、あまり役に立たないようです。初心の人には「何を言ってるのだ？」と意味が理解できないし、経験を積んだ人には「そんな事は知ってる」という風になるのです。「今、その事が知りたい」という人に「ピッタリ」とはなかなかいかないものです。

よく「教えてもらう」のではなく「見て盗む」のだと言ったりしますが、親方や先輩方にも自分の仕事があるので、そんなに弟子や後輩の面倒ばかりを見てられないのです。実際のところ、親方や先輩の仕事を見ていると「あの時あんな風にはったな」と何とはなしに分かる事が多いのです。どうにも分からない事は、手の空いたときに尋ねると教えてもらえる事が多いのです。

※2 箱入り娘：木製の駒をスライドさせて、特定の駒を外に出すパズル。

シリーズ 会員に訊く (第1回) 竿頭齋 小川進さん (前ページからの続き)

—それでも解けちゃったのですね!。「情熱を持ちつつ、気合を入れ過ぎない」ということが肝要なのだと思いますが、努力で身につけるのはなかなか難しいことですね。私なんかはつい「生まれ持った性質だから」として諦めがちですが、小川さんのご家族も工芸に携わっておられたのですか?

小川: いえ、竹工芸の仕事に就いたのは私だけですが、私の叔父が満州から戻って家電製品の仕事をしていた、扇風機的设计図を作っていたそうです。残念ながら完成を待たずに亡くなってしまったのです。

私が六つ目編みの編組図面を作画してまとめた本(※3)を著したときは叔父さんの「無念を晴らしたぞ」という感慨深い気持ちになりました。

—最後に、これから竹工芸を志す若い世代に向けて一言お願いします。

小川: 技術的な事なら、力になりますよ。でも、うーん……やめといたほうがいいよ(笑)

編: (笑)。

取材日: 2021.6.24 (木) 京都市産業技術研究所

▶▶小川進さんインタビュー  
フルバージョンは研究会ホームページなどに掲載予定。お楽しみに!



※3  
『竹編組模式図集・六つ目編』発行: 京都竹工芸研究会・京都精華大学美術学部 (2000年3月)



編集後記: 小川さんは多弁な方ではありませんが、その訥々とした語り口から、誠実なお人柄を感じました。生真面目な中にも独特のお茶目な雰囲気があり、竹編組勉強会では毎回直筆のお手紙を郵送でお送りいただくのですが、そのユーモアあふれる文章には毎回癒されています。竹編組勉強会では私も参加させていただいており、小川さんのご指導で砥いだ竹のペーパーナイフでお手紙の封を切るうとしたところ、封筒の糊付けに一分の隙も無かったためナイフの刃先すら入らなかったことに、小川竿頭齋の仕事の徹底ぶりを垣間見た気がしました。

### 3. 見学会報告

#### 「上野リチ: ウィーンから来たデザインファンタジー」

2021年12月8日(水) 西陣織物研究会, 京染・精練染色研究会 合同開催

今回の展示会はリチの本格的な回顧展。リチが手がけたテキスタイルデザインを中心に、インテリア、食器、アクセサリ、雑貨など身の回りの工芸品が展示されています。

鳥や草花、人物、街の風景などシンプルに描いた軽やかな線、明るい自由な色彩。上野リチのデザインには思わず「可愛い!」と心をときめく魅力があふれています。ウィーンで活躍していたデザイナー上野リチは京都出身の建築家上野伊三郎との結婚を機に来日、夫とともに京都で活動。リチは1933~1944年まで京都市染織試験場(産技研の前身)の嘱託でデザイン指導をしており、1951~1963年まで京都市立芸術大学で教鞭をとりました。

見学に先立って、同館学芸課長・池田裕子氏より、リチのウィーン・日本・アメリカで展開したデザイナーとしての活動について講演いただきました。産技研所蔵の染織試験場時の試作品が展示されていますが、当時の試験場の指導の様子が偲ばれる貴重な資料となっています。



会場: 京都国立近代美術館  
会期: 2021年11月16日  
~2022年1月16日

#### 事務局より

- 2022年1-3月の主な予定
- 1/31(月)京都ものづくり協力会新春講演会 (於京都市産技研)
- 2/9 (水)セミナー「伝統産業×デジタルFab」 (於京都市産技研)
- 3/2 (水)~3/6(日) 令和3年度漆工コース修了作品展 (於京都伝統産業ミュージアムMOCADギャラリー)
- 3月下旬 第4回委員会
- \*月1~2回適宜 事業企画チームミーティング

フェイスブック「京都工芸研究会@kyotonokougei」は随時更新!

祝

令和3年度 現代の名工(厚生労働省)を受賞されました。

象嵌屋小野 小野信一(真嗣)氏

心よりお祝いを申し上げます!